

1. 移動・宿泊・観光編

日本から Budapest (Hungary: Budapest Liszt Ferenc 空港) への直行便は就航していないので、どこかでトランジットが必要になります。仁川、Dubai、Munich、Frankfurt などが代表かと思いますが、他にも色々経由地があるみたいです。思いがけない経由地で航空機を格安にできることもあるため、比較サイト等で複数路線検索し、日程にゆとりを持つと移動費を抑えられるかもしれません。トランジットが不安な場合は Munich や Vienna などに降り立ち、そこから電車で行くという方法もあります。今年の参加者の吉田先生は、Munich から Hallstatt 湖などにも寄って観光しつつ、Budapest 入りされていました。今回は Helsinki-Vantaa 国際空港（フィンランド）経由のフライトを選択しました。行きは東京を夜に出て、早朝の Helsinki を経て、昼に Budapest 着、帰りは昼に Budapest を出て、夜の Helsinki を経て、昼過ぎに東京着でした。東京～Helsinki 間は 13 時間程度のフライトで、そこでいい感じに寝るとちょうど時差が解消されるような旅程でした（時差は 7 時間）。

Helsinki 空港には熊本の誇るラーメン屋チェーンである味千ラーメンがありました。かつてローマの空港でもみかけたので、空港業界ではメジャーなのでしょうか？（ちなみに熊本空港には出店していません。）噂には聞いていましたが、フィンランドは非常に物価が高く、ラーメン 1 杯 20 ユーロ（約 3200 円）程度でした。話のネタになるので食べようかとも思いましたが、ラーメンに 3000 円も支払うことを私の魂が拒絶したため、結局食べず仕舞いでした。

Budapest Liszt Ferenc 空港は比較的最近建て直されたようで、綺麗なおもむきでした。CA さんやグランドスタッフもすべて英語対応してくれるため、ハンガリー語がわからなくても安心です（掲示板もすべて英語）。出発ロビーにはお菓子や酒などの主だったお土産が売っており、街で無理に買わずとも空港で問題なさそうです。

空港からホテルへと向かうにはタクシーが楽ですが、ブタペスト中心地までは 9000～10000 フォリント（HUF）程度、日本円では 3500～4000 円（1 HUF=2.56 円で換算）とやや値が張りました。空港から出たすぐ外に公式のタクシー受付があり、そこで行き先の住所を伝えれば黄色いタクシーを呼んでもらえます（ここで呼ぶとボッタクリタクシーに乗ってしまう可能性を防げます）。その他、バスで向かう方法もあり、タクシーよりも安価で、こちらを選択している方もいました。私は面倒くさがりなので、タクシーを利用しましたが、バスを使っていれば、差額で味千ラーメンを食べれたような気がします。ホテルは AKEAH verdi という研修先である Semmelweis 大学の目の前で、尚且つ地下鉄の駅（Semmelweis Klinik 駅）もすぐ側にあり大変便利な立地でした。ホテルは大変綺麗で、受付の方の対応も大変良かったです。朝食はビュッフェ形式でした。研修前のウェルカムディナーもこのレストランで開催されます。洗濯できる設備はないので、自分で洗うか、近くのコインランドリーに行く必要があります（コインランドリーまで歩くと 15 分～20 分）。



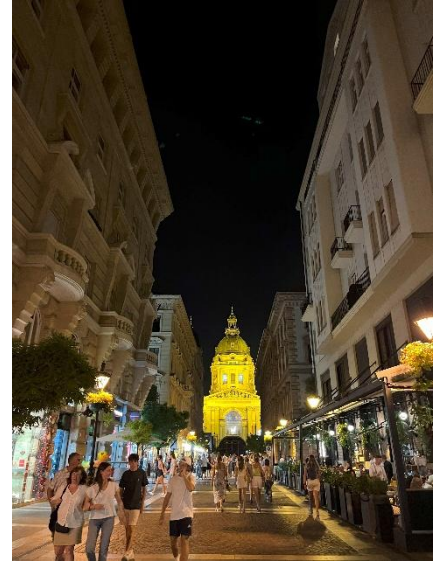
今回は研修先の Kiss 教授からのご配慮で地下鉄のフリーチケットを頂きました。地下鉄で Budapest の繁華街や観光地まですぐに行けるので、しばしば利用していました。ハンガリーの地下鉄の駅にはチケットを通すような改札はないので、基本的に自由に出入りできるのですが、時折入り口でチケットのチェックが行われており、持っていないと高額な違反金を支払うことになるようです（たまにチェックする人をみかけます）。その他、ヨーロッパでは日本以上にスマートモバイル（日本で流通している Luup とは違い、Lime、TIER など）が普及しており、地下鉄で行くのに微妙な場所もスクーターで簡単に移動できます。Budapest はコンパクト

トな街なので、有名観光地へも地下鉄かスクーターで簡単に移動できます。

ハンガリーの人口は約 1000 万人で、200 万人ほどが首都の Budapest に住んでいます。主要な言語はハンガリー語です。勉強してみるのもいいですが、アジア人の顔を見るとほぼすべての人が英語で話しかけてくれるため、ハンガリー語の出番はありません。ハンガリー語の Yes は Igen というのですが、これは語感が妙に心地よく、ハンガリー人は Igen を連呼するため、真似して Igen, Igen, Igen と言いたくなります。フランクな挨拶は Szia ! (英語でいうところの Hi !) なので、街なかでは Szia ! を使ってみてもいいかもしれません (かなりフランクなので大学内では使えません)。名前の記載は姓名の順で、日本と同様のパターンであるため親しみが感じられます。文法上も語句の配置が自由であり (英語のように SVOC、SVO などの語順ルールがない)、日本語と語族の上で知られざる共通点があるのかもしれません。

Budapest はドナウ川を挟んで、西の Buda と東の Pest (ハンガリー語ではベシュトと発音します) からなる街で、夜景も含め大変美しい街です。人生で見た文化的な夜景で最も美しかったと明言できます。著名な観光地としては聖 Istvan 大聖堂 (地元では親しみを込めてバジリカと呼ばれていました) や Buda 城などがあります。個人的な感想としては、西ヨーロッパの首都 (パリやローマ) と比較しても豊かな観光地で、町並みは美しく、なおかつ人もあまり多くなく、物価も日本と同程度なので大変満足の行く観光ができました。

個人的に行って良かったのは、リスト記念館 (入り口がわかりにくい)、地下の迷宮 (入り口がわかりにくい) などでしょうか。ハンガリーは数学系の有名人が多く、20 世紀最大の天才の 1 人であるところのフォン・ノイマンもハンガリー出身で、生家が残っていました (中には入れませんが)。また、肌で感じたことですが、夜間帯でもかなり治安が良いと思います。



食事はグヤーシュというスープが 1 番有名なようですが、実際の街に行くと様々な国のレストランがあります。ハンバーガー、ケバブ、イタリアンなどの店が多い印象で、ジェラート屋さんも散見され、イタリアン系の食文化に近い印象でした。東アジアや東南アジアの料理を出す店もありました (日本語の看板につられて入ったラーメン屋は完全に中国料理屋さんで、ラーメンは激辛でした)。基本的にサーブされる食事の量が多く、日本の 1.5 倍量はあるので注文の際は気をつけた方が良いでしょう。アルコールに関してはワインが有名です。特にトカイの白ワインが名物で、お土産としても至る所で売っています。



我々も数人で近くのワインショップに行き、それぞれの医局のボスにお土産を購入して帰りました。また、嬉しい誤算だったのがビールが美味しいところでした。比較的あっさりとした味わいのラガービールが有名で暑い季節にちょうどよかったです。その他ここ近年はマイクロブルワリーが増えており、いわゆるクラフトビールと呼ばれる IPA などのビールもハンガリーでは人気です（アメリカのビールなどと違いハンガリークラフトビールは国外不出なので、ぜひ探してみてください）。



2. 研修編

今回の研修はハンガリー最大の医学部である Semmelweis 大学で行われました。Dr. Semmelweis は産褥熱の原因究明に寄与したことで知られている産科医です。今から約 250 年前、ハンガリーがハプスブルク帝国の一部であったところに、時の女王であるマリア・テレジアが国内での死亡者全ての剖検を義務とする法律を制定しました。それ以後、現在に至るまでその伝統が続いています。Semmelweis 大学では年間 2000 例の剖検症例があり、その数は日本の大学病院の約 50~100 倍に及びます。そのため、ハンガリーの病理医あるいは剖検に関わる技師は、高度な技術とマクロでの診断能力を有しています。日本との大きな違いは、以下の 3 つだそうです。マリア・テレジアに恩恵を預かる法的な背景、そして剖検費用を大学ではなく国が負担する点、そして最大のポイントとして、剖検が必要かどうかを臨床医だけではなく臨床医+病理医で判断するという点が挙げられます。ハンガリーでは日本と異なり臨床医と病理医のどちらか一方でも死因に不詳な点があると判断したら剖検が行われます（日本では剖検を行うかどうかは臨床医に一任されています）。こういった事情からハンガリーの死因統計は剖検によって高い信頼度を維持されているのです。以下は、ハンガリーの剖検で日本と異なっていると考えられる部分です。※私の 1 週間の経験に基づく記載であり、多少の間違ひはあるかもしれませんが。



医師は臓器の切り出しやマクロ所見の評価にのみ関与し、御遺体からの臓器の取り出しは剖検の資格を有する技師が行っています。剖検技師の技術は非常に高く、それは彼らの出で立ちにも現れています。私達の指導を担当してくれた技師の Izsó さんは年間約 1000 件、1 日最高 8 件の剖検を執刀する恐るべき技術者ですが、彼はおしゃれな PATHOLOGIA とロゴの入った T シャツにナイロンエプロンをかけ、あとはゴーグルと手袋のみで剖検を行っています。剖検時に御遺体との距離を一定に保ち、無駄な力をかけずに臓器を剖出するので、血液や体組織が飛散しないのです。また肘や前腕が御遺体に触れてしまうこともありません（我々は



日本と同じ完全防備で臨んでいましたが、徐々に軽装になっていった気がします)。取り出した臓器のホルマリン固定は行わず、全てその場で切り出され評価され、必要ブロックの採取後は御遺体に返納されます。また基本的に全例開頭であり、脳も未固定のままその場で冠状断に切り出されます。よって標本として作成されるブロックは必要なものに限られ非常に少ないです(さらに PMiP コースでは時間的制約があるため全て凍結標本として作成されました。普段はホルマリン固定されています)。

また、PMiP コース中に限らず概ねその週のうちにマクロ所見に基づき剖検報告書は記載されていると思われます。圧倒的な症例数の多さが日本とのやり方の違いを生み出しているのかもしれませんが。研修は基本的に英語で行われます。ハンガリー語の発音は第1母音に必ずアクセントを置くため、ラップのようなリズム感と比較的抑揚が少ない話し方に聞こえます。そのためか、ハンガリー人の英語はネイティブスピーカーに比べ日本人にとって聞き取りやすいと感じました。

最後になりますが、この PMiP 研修は大変有意義な時間を与えてくれたものでした。剖検に関する技術やマクロ所見の取り方、剖検診断に至る明快な思考プロセスなど多くを吸収する事ができ、1日に2回の解剖を繰り返すことという日本では決して体験できないスケジュールのおかげで、ブラッシュアップ、デブリーフィングを兼ねて次へ、また次へと習得したことを忘れないうちに次の解剖に活かせるという貴重な経験ができました。また、今回は私を含めて5人で参加しましたが、非常にいいチームでした。関東、関西、中部、九州と離れた地で頑張る同年代の病理医達とのつながりを得られたこともまた、大きな成果です。

1週間とは思えない濃密な時間を終え、美しい Budapest の街並みと、そしてチームのメンバーとの別れを惜しんで、数々の思い出とワインで重くなったキャリーを持って飛行機へ乗り込みました。

